

## はしがき

この報告書は、愛知大学人文社会学研究所の主催により2017年10月7日に開催されたワークショップ「社会調査の成果を社会に還元するために——調査実践をとりまく磁場と調査者の役割を再考する」の記録を収録したものである。招聘した報告者・討論者はいずれも社会調査の経験豊かな社会学者であり、「社会調査の成果をいかに社会に還元するか」というテーマを共有しつつ、各々のフィールドでの経験をふまえた率直な議論が展開された。

調査過程の開示は、それ自体、調査結果の確からしさ（妥当性や透明性）を担保する方法として、社会調査法のなかに位置付けられてきた。だが、どこまでがその研究において開示すべき調査過程で、どこからがあらためて開示する必要のない調査過程なのかという問いには、予め与えられた「正解」や共通理解があるわけではない。どこまで、どのように調査過程を開示するかを模索することもまた、社会調査という営みが位置付けられる文脈が多様化するなかで望ましい社会調査のあり方を構想し実践することと不可分である。その意味で、報告者・討論者の調査経験がさまざまなかたちで詳らかにされた本ワークショップは、あるべき社会調査の構想の場であったと同時に、その実践の場でもあったように思われる。

ただし、調査者が一堂に会してそれぞれの調査経験を語らうこうした場合は、社会調査のあり方を再帰的に問うことで社会調査法を彫琢するという趣旨が後景化してしまうと、あるいは、調査者の置かれた文脈やフィールドとの緊張関係を失ってしまうと、調査者同士が「裏話」を披露するだけの場に陥りかねないこと（仮にそうでなくても外部からはそのように見えかねないこと）については、自覚的である必要がある。本ワークショップが実際にどれほど緊張感を保った議論の場を実現できていたかは、当日の参加者と本報告書の読者による批判に委ねたい。

以下に掲載するワークショップの記録は、当日の録音データを文字に起こし、それを再構成したものである。事後的な加筆修正を最小限に留め、登壇者の発言をそのまま掲載することに努めたことで、かえって論旨がわかりにくくなった箇所もあるが、ここでは議論の臨場感を再現することを優先した。ただし、調査協力者をはじめとするさまざまな関係者への配慮から、編集過程で大幅に表現を変更した部分があり、また本報告書への掲載を見送った内容もある。

\* \* \*

登壇者の皆様、また本ワークショップの開催にあたってさまざまにご支援いただきました愛知大学の皆様に、心よりお礼を申し上げます。もとより愛知大学には、学際的な村落研究・地域調査の分厚い歴史があり、こうした社会調査のなかで蓄えられてきた有形無形の知的資源を現代的文脈のもとで再発見する視点の一助として、本ワークショップの議論が資することができれば大変幸いです。

2018年3月 編 者